

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No. 20 [2003 / 2004 No. 3]

日本サンゴ礁学会 第7回大会

のお知らせ



日本サンゴ礁学会第7回大会を、
下記の通り開催致します。

今年は、6、7月に沖縄で第10回ICRSが開催されます。
第7回大会は、ICRS開催後、次のステップの日本サンゴ礁
学会にとって、大きな意味のある大会になると考えます。
皆様のご参加をお待ちしています。

実行委員長 国土舘大学文学部地理学教室 長谷川 均

2004年11月12日(金)から14日(日)

国土舘大学世田谷キャンパス
(東京都世田谷区)

contents

page

連載1：サンゴ礁に暮らす人々 -14-	2
連載2：サンゴ礁夜話 -14-	2
ニュース -1-	3
日本サンゴ礁学会入会案内	3
連載3：若手会員の眼 -16-	3
日本サンゴ礁学会第6回大会報告	4
ニュース -2-	4
評議委員会・総会議事録	5,6
連載4：瀬底日記 -10-	7
連載5：サンゴ礁関連施設探訪 -10-	7

[黒潮生物研究所]

連載1 サンゴ礁に暮らす人々-14-

平等に分ける

慶應義塾大学名誉教授 近森 正

「いいかい。よく聞くんだよ。食べものはいつでも、皆で分け合わなくてはいけない。」ヤト村のナリンギ婆さんは話し始めた。

ラグーンを渡ってきた一陣の風が、子供達を手招きするように、ココヤシの葉を大きく揺らした。

「昔、タマヌという男がおったんだと。ある日、一人で浜を歩いていると、卵を産みにきた大きなウミガメを見つけた。彼はそれを捕まえると、その肉をひとり、こっそりと食べてしまったんだと。彼はトゥアンガ（食物配分集団）の仲間とそれを分け合わなかったんだ。」

それからしばらくして、彼の妻がみごもったのさ。生まれた子供は大きくなって、ウミガメのように地面を這い回るばかりで、立つことができなかった。

そこで、彼は父親に相談したんだと。そうしたら、父親は怒って『タマヌと子供達を自分の墓に入れるわけにはいかない。』と云って、彼らを祖先の系譜から追放してしまったのだそうだ。」

この説話は食物を分け合う集団が、墓葬地を共有する父系出自集団であることをよく伝えている。

環礁の暮らしはきびしい。時折サイクロンや早魃によってタロイモがみんな枯れてしまったり、漁に出られない日々が

続くことがある。それに、年に何回か物資を運んでくる船が一ヶ月も、二ヶ月もやって来ないことだってある。島民の長い歴史のなかで、食糧危機への対応のひとつは分配集団の組織化にもとめられたのである。

今日でも、平等に分かち合うことが環礁に住む人々の社会規範をつくっているのである。



写真：ナリンギ婆さんはどこに行っても物語りを聞かせる。話しを通して子供達は守らなければならないことを教えられる。トゥアンガとは割当てる、分けるを意味し、お互いに食物や財産を分配する人々の間柄を指す。

連載2 サンゴしょう夜話-14-

イシサンゴによる 時系列環境解析と同位体化学

金沢大学名誉教授 小西 健二

前号の補足だが、オーストラリア国立海洋研究所のDave Barnes 博士を核にオーストラリア・サンゴ記録研究グループ (AUSCORE)が、馬博士はじめ先駆者から現在にいたる、イシサンゴ骨格成長編研究の総括を進めていることを知った。

関心のある方は次のホームページを

(<http://www.aims.gov.au/pages/auscore>)。

古環境解析で時間軸の設定は基本だが、その時計に、付加成長する生物硬組織の刻む「成長縞」を用いる発想は、前世紀中頃から生物硬組織内の放射性同位体による年代測定と安定同位体比測定の導入で飛躍的に強化された。前者の放射性炭素、ウラン系列核種、ストロンチウム、後者の酸素などは適例である。

問題の元素や同位体が生物硬組織を形成する in vivo の生理的過程の実測と、in vitro で構築された無機化学の平衡論や運動論の間の溝を埋め、更には鉱物学や「死後変質」(ダイアジェネシス)効果の検討など、それぞれの得技で、生物学、化学、地質古生物学の研究者が協力して、日本でも、日本古生物学会主催、東京大学海洋研究所共催で、60年代後半から80年代前半にかけて、総合研究班、ワークショップ、そしてシンポジウムが盛んに行われた。

ことに同位体化学では木越邦彦、阪上正信、堀部純男、北野康、中井信之、酒井均ほか斯界の権威が、天然の試料と室内実験と「理論」を、何とか矛盾なく調和させ実用化しようと努める地質古生物学分野の研究者に協力を惜しまなかった。初めは測定装置の絶対数も少なかったが、機器分析化、コンパクト化、と日本の経済発展を追風に、今では、イシサンゴ

による時系列環境解析で最も基本的な研究方法として定着した。その間放射性炭素とウラン系列核種については、ともに放射能測定に、質量分析測定が加わり、分析精度も進み、新たな研究課題が生まれつつある。(例えば Villemant & Feuillet, 2003)。分析用試料の超薄切片分離技術も日本で著しく進んだ。

あたかも前世紀中頃、地質古生物学、岩石学、地球物理学、地球化学などの interdisciplinary なアプローチから、プレートテクトニクス(写真)を結実した地球科学が、21世紀を迎え宇宙地球科学として、今や multidisciplinary 複合科学として、発展をめざすように、サンゴ礁学も interdisciplinary から社会・経済学的洞察をもつ multidisciplinary へと、大きな転機を迎えている。



写真:金沢大学低レベル放射能実験施設の放射性炭素測定用ラインをみる、海洋底拡張説や隕石孔地質学など新説を提唱し、前世紀後半の地質学を発展させた、Robert Dietz 博士(1979年7月;彼は終戦間もなく来日し、初期のスキューパーで我々を驚かした)。



日本サンゴ礁学会 入会案内

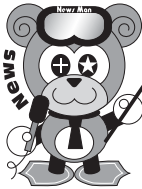
1997年に設立された本学会は、設立当初238名だった会員数が現在は384名に増加しました。第10回国際サンゴ礁シンポジウムの沖縄での開催を期に、学会の国際化、学際科学としてのサンゴ礁学の発展、社会に対する貢献をより幅広く展開していきたいと期待しています。

会員の皆さんの周辺に、学会に新たに加入して下さる方はいませんか。

通常会員だけでなく、会員数の増加のわりに増えていない、学生会員、団体（講読）会員、賛助会員、会友会員が多く参加して下さることを期待しています。今号に入会申込用紙を同封しました（同用紙は、学会ホームページからダウンロードできます）。どうか周辺の方で学会に未加入の方に同用紙を配布して、加入を薦めて下さいませようお願いいたします。大学の教官の皆様は、指導学生への加入をお薦め下さい（学生会員数は横這いの状態です）。

事務局 茅根 創（東京大学）

なお同用紙は、既入会会員の所属・住所変更届けにも使えます。2003年3月以降所属・住所が変わり、まだ変更届を出されていない方がいらっしゃいましたら、同用紙に記入の上、学会事務センターまでお送り下さい。メールアドレスの変更もお知らせ下さい。sango MLでは現在も活発な情報交換が続いており、最近メールアドレスを変更され最近sango MLが届いていない方は、宛先不明で登録が削除されている可能性があります。



ニュース①

DIALOG

（水域を対象とする若手研究者のためのイニシアティブ）
第5回シンポジウムに参加して

DIALOG (Dissertations Initiative for the Advancement of Limnology and Oceanography) は、水域に関わる全ての研究の相互理解と交流を促進するため、若手研究者間（年齢には関係なく博士学位を取得したばかりの研究者）の交流と研究者としての初期発展を促すとともに、若手研究者を学会に広く紹介する活動を行っています。学位取得者のデータベース、最新の研究・公募情報を提供するメーリングリスト、定期的なシンポジウムの開催が主な活動です。また、気候変動とその影響に関わる研究を対象にした同様のプログラム (DISCCRS) があります。両プログラムの詳細と参加方法は、<http://aslo.org/phd.html>を参照下さい。後援学会の会員でなくても、関心のある方は誰でも参加できます。

DIALOGは、毎回約40名の新規学位取得者を集めてシンポジウムを開催しています。参加は応募選考方式で研究業績に基づいて決められますが、分野・国籍・性別など多様な参加者構成になるように努められています。参加費用は基本的には全て賄われます。第5回DIALOG本体には世界各国から447名の登録があり、内シンポジウムの応募者は33%で

した。また、応募者のうち招待されたのは34%でした。この数字は全体のもので実際は6-7割の参加者は米国からです。特筆すべきは、日本を含めてアジアからのシンポジウム応募者が少ないことです。日本からのシンポジウム応募者はこれまで毎回すくなく0-2名でした。また、DIALOG本体への日本からの登録も少ないのが現状です。

日本を含めてアジア諸国からの参加者が少ない理由として、このプログラムが周知されていないこと、言葉の不自由さが挙げられるかもしれません。しかし、全ての参加者が流暢に英語を話すわけではありません。それでもシンポジウムの最後には、参加者同士に親しく友好的な関係が自然に築かれています。

シンポジウムの日程は全8日間でした。以下に内容を並べますが、それぞれが日程内に分散して行われました。今回の開催地は大西洋の島バミューダにあるバミューダ生物学研究所でした。1. 研究紹介、口頭発表とポスター発表が友好的な雰囲気の中行われ、期間を通じて活発に議論を行うきっかけになりました。2. ワーキンググループ、同じ関心を持つ者同士がその場で柔軟に集まってグループが作られ、参加者が主体的に議論を展開しやすい環境でした。3. 様々な助言や情報提供、就職活動・研究費申請・国際共同研究・社会への情報発信・アウトリーチプログラム（科学

のすそ野を広げる活動）の紹介など多様で、各方面の専門家から助言がありました。多くの助言は今後上記のホームページで公開されます。4. その他、DIALOGへの予算提供機関の紹介。開催場所である研究所の紹介と所属員の方々との懇親会。フィールドトリップ。

様々な国からの多様な背景を持つ若手研究者と、将来に渡り継続かつ発展するであろう人のネットワークを築くことができました。現在それぞれに抱えている問題など、ワーキンググループやその他の時間を通して、共通認識を作ったり助言を得ることができました。科学研究は近年ますます国際化しつつありますが、このシンポジウムは国際的な環境下で作業を共にする最初の機会を若手研究者に提供しています。

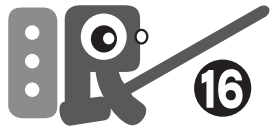
若手の皆さん及びその指導教官の方々には、これらのプログラムに参加され（参加を学生に促され）その利益と楽しさを是非享受されることをお勧めします。

過去のシンポジウム参加者である加藤元海氏、駒田友子氏、山崎彰子氏より助言を頂きました。また、より詳しい内容はサンゴ礁学会MLに転載して頂きました。

吉田 丈人 日本学術振興会海外特別研究員
Department of Ecology & Evolutionary Biology, Cornell University
Corson Hall, Ithaca NY 14850 USA
email: ty59@cornell.edu
tel: +1-607-254-4273 fax: +1-607-255-8088

連載 3

若手会員の



A young member's eye

お茶の水女子大学 人間文化研究科
ライフサイエンス専攻 下村優子

どうも、こんにちは！第6回サンゴ礁学会では、某所長様より口頭発表の様子から「女子アナ」の異名を賜りましたお茶の水女子大学・服田研 M2の下村優子です（演題：ミドリイシ初期ポリプへの褐虫藻の高率導入）。今回は若手会員の眼の16人目の担当者としてよろしくお願いします。

そんな女子アナ下村を生んだ服田研は、現在服田昌之先生率いる6名で構成されている（ポストク1名、修士2名、学部4年2名）設立3周年の小さな研究室です。それでは早速レギュラーメンバーの服田先生と磯村尚子さんを御紹介しましょう。ポスの服田昌之先生は...一言でこの方を表すのは無理です。言えるのは何に対しても「真面目」で「博識」

だということでしょうか。日々の仕事に忙殺されかけても、風邪を引いても決して学校もゼミも休まない。そして生物全般の知識・雑学の幅広さには毎回驚きます。学生：「深海生物は捕食者に見えにくい赤色をしているんですね」先生：「実は忍者也間に紛れるよう赤紫の服だったんだよ」学生：「へえ～」なんてやりとりが頻繁に交わされています。磯村尚子さんは、今年ポストクとして服田研に入りました。下手なギャグを言うものなら明るくドライに「ゆるいギャグ禁止～」と突っ込んでくれる、突っ込み兼ムードメーカーとして服田研になくてはならない人です。そんな方々を筆頭に、服田研は小さいながらも色々とこだわりのある研究室で、「プレゼンテーション」もその一つ。聴衆に分り易くする為、内容へのこだわりは勿論、「拳をきかせた」オーバーアクションや話し方が要求され、厳しい指導とチェックが入ります。お陰様で「女子アナ」誕生というわけです（笑）。また研究にも熱いこだわりがあります。服田研研究理念「みんなに「へえっ！」と言ってもらえる面白い研究を目指すこと」を遂行するには、アイデアと実行力が勝負です。実際、服田先生の湧き出るアイデアと、歴代服田研学生7人に共通する根性が合わさって、3年という短い歳月の中で色々と結果を

出してきました。その例の一つが、今学会での若林陽子さん('02服田研卒業生)の最優秀ポスター賞の獲得でしょう。特に研究の新奇性において高く評価されましたが、その裏には明け方の実験室に出没するゴキブリと無言で格闘（共生？）しながら観察する彼女の姿があったそうです...。さて、そんな服田研の現在の研究テーマは「サンゴ種苗生産の基礎研究」と「サンゴ幼生の着生・変態機構の解明」で、この夏もケラマの阿嘉島で産卵シーズンの1ヶ月、フィールドワークと生物実験を行ない、オフシーズンの今はそのサンプルの遺伝解析を行なっています。紙面の関係上かなり割愛していますので、服田研についてもっと知りたい、もっと裏話がききたい、研究内容を詳しく知りたい、等のご要望がありましたら下村 (g0240433@edu.cc.ocha.ac.jp、3月卒業なので注意！) または服田先生 (mhatta@cc.ocha.ac.jp)まで御連絡下さい。ちなみに、男子学生のみなさん！お茶院入学資格は女子限定なので、入りたい方は受託研究の形か、女装して来て下さいね（冗談です）！

最後に、長々とここまで読んでくださった方々に感謝します。私にサンゴの魅力を教え、ここまで育てて下さった服田研を多くの人に知ってもらえれば幸いです。

第6回大会報告

大会実行委員長
玉井恭一（西海区水産研究所石垣支所）



日本サンゴ礁学会第6回大会は、2003年11月14日（金）から11月16日（日）の3日間にわたって、石垣市民会館を会場として開催されました。当初、遠隔地での開催のため、参加者は例年より減少するのではないかと懸念されましたが、大会参加者は176名、発表総数は88件（口頭39件、ポスター49件）に上り、嬉しい誤算となりました。最終日の午後には1000名収容の大ホールで、環境省、沖縄県との共催による公開シンポジウム（テーマ：島人の宝「サンゴ礁」を次の世代に残そう）が開催されました。パネルディスカッションには、長きにわたってサンゴ礁で活動してきた漁業者やダイビング

関係者もパネラーとして発言し、総合学習の授業でサンゴ礁について学んでいる小学生達も参加して、サンゴ礁の保全が市民のあらゆる層の課題であることを印象づけました。



Congratulations! ポスター賞受賞者報告

日本サンゴ礁学会第6回大会で、
以下の方々がポスター賞を受賞しました。
本当におめでとうございます！



受賞者より

飯嶋 寛子

最優秀賞

所属：東京大学理学系研究科

タイトル：サンゴ年輪の ^{14}C 、 ^{18}O 解析による西太平洋熱帯域パラオの湧昇および降水量変動の復元

共同研究者：茅根 創（東京大・理）・森本真紀、阿部 理（名古屋大・環境）・松崎浩之（東京大・原総センター）

本研究では、サンゴ骨格年輪に記録された放射性炭素（ ^{14}C ）濃度の季節変動を解析し、物理観測データとの比較から、 ^{14}C 変動と湧昇変動とが一致することを報告しました。今回の発表にポスター賞の栄誉をいただき、大変光栄に思っています。また、多くの方々から質問・コメントをいただき、活発な議論することが出来ました。どうもありがとうございました。今後もサンゴ骨格年輪についての様々な分析に挑戦し、サンゴ骨格中に記録されている環境情報を探っていきたいと考えています。最後に、共同研究者の茅根創先生、森本真紀博士、阿部理先生、松崎浩之先生に、この場をかりて感謝申し上げます。

若林 陽子

最優秀賞

所属：東京大学理学系研究科

タイトル：ミドリイシ幼生変態ペプチドの構造－活性相関

共同研究者：岩尾研二（阿嘉島臨海研）・藤澤敏孝（遺伝研）・服田昌之（茶女大）

ポスター賞をいただき本当にありがとうございました。ポスター賞など考えもありませんでしたので、本当に驚きました。うれしかったです。今回受賞した研究は、お茶の水女子大学理学部生物学科服田研究室において卒業研究として行ったものです。ミドリイシの変態を誘導する神経ペプチドであるHym-248に着目し、さまざまな改変ペプチドを用いて変態誘導活性に重要なペプチドの1次構造を明らかにしました。変態ペプチドの活性に重要な構造の解明は、サンゴの着生変態の分子機構を解明する上だけでなく、サンゴの種苗生産を実用化する上でも非常に重要だと考えています。今後のサンゴ研究の一助になればと思っています。

梅澤 有

優秀賞

所属：東京大学海洋研究所

タイトル：褐藻類 *Padina* spp. の ^{15}N 分布からみた陸起源窒素影響域の季節変化とその要因の解析

共同研究者：宮島利宏・田中泰章・小池勲夫（東大海洋研）林原 毅（西海水研・石垣）大葉英雄（海洋大）

本研究は、サンゴ礁における一次生産者の窒素源の時空間変動とその要因について、サンゴ礁域に生息する海藻の ^{15}N を主な指標とし、海藻の様々な生理特性を明らかにするための培養実験や様々な環境要因の調査と組み合わせで明らかにしてきたものです。大学の学部3年生の時に初めて石垣島のサンゴ礁を訪れ、大学院での研究のメインフィールドとして、地元の海人の方々、そして西海区水研石垣支所の方々にお世話になって仕事をさせていただきました。石垣島で開かれる初めてのサンゴ礁学会にて、一連の研究を評価していただいたことを非常に嬉しく思うと共に、改めて、お世話になった方々に、この場を借りて御礼を申し上げます。



ニュース② 第3回サンゴ礁学会 保全委員会が開催されました

- 日 時：平成15年11月14日（金）18：20～
 - 場 所：石垣市民会館中ホール
 - 参加者：約50名
- 議事録は学会HPに掲載予定です

各ワーキンググループ（WG）の活動方針などを中心に議論しました。

（WG：統括班、モニタリング・ネットワーク班、保全・再生技術班、統合的沿岸域管理班、海外展開班、教育班、広報班）

日本サンゴ礁学会 評議員会 議事録

日時: 2003年11月13日(木)
13:30 ~ 15:00

会場: 環境省国際サンゴ礁研究・
モニタリングセンター(石垣市)

出席: 大見謝、大森信、鹿熊、カサレト、
茅根、菅、小西、杉原、鈴木、土屋、中井、
中森、中野、瀬岡、橋本、林原、波利井、日
高、藤田、藤村、藤原、松田、山里、山野
以上評議員24名
保坂(監査)

委任状: 秋道、大森保、木村、近森 4通
欠席: 西平

1. 事務局報告(茅根)

1) 会員動向: 4年間会費未納者を除籍、前
回保留の2名も除籍。「除籍」の名称を「退
会」に変更するため、会則の変更を総会では
かる。

2) 2002-2003年会計報告: 報告がなされ、
監査から予算は適正に処理されているが、理
想的には予算通りの執行が望ましいとする発
言があった。今後、10ICRSにあわせ、個人、
賛助会員の大幅増が必要。なお、大会へ支出
する10万円は大会終了後、学会へ返納、赤
字の場合はそれを申告して評議員会の同意を
得て補填するという原則を確認した。

3) 2003-2004年予算案: データベースと
Webの作成、来年のICRSのために会員数
を増やしたい。

2. 各委員会活動報告および新年度計画

1) 企画委員会(中森)

今夏完成目標の日本のサンゴ礁研究デー
タベースは今大会終了後から本格着手。
> 懸案のデータベースが終わらないために、
学会の長期活動方針を定めるとい企画委員
会本来の役割を果たしていないのではない。

2) 学会誌委員会(日高)

第5号は10月30日に発行したが、原稿集
まらず、年2回出版の目標達成ならず。コー
ラルリストで投稿呼び掛けやWebでのアプ
ストラクト公開などを行い、今後も年2回出
版の目標で努力する。また編集委員として山
野、松田、服田に加わってもらう。
> ミニシンポジウムなどの成果を特別号とし
て発行すると良いという意見も出され、今後
検討することとした。

3) 広報委員会(山野)

ニュースレター年4回出版配布し、新年度
も順調に発行する。ただし、評議員全員が新
たな広告主を開拓する必要あり。また、
ICRS NewsはICRS大会前と後にも1号発
行する。

Webを近々リニューアルする。

> 日本のサンゴ礁DBが完成をみたらWebに
載せるが、CDの作成を見合わせるかについ
ては、今後企画と広報で検討することにした。

4) 選挙管理(瀬岡)

選挙結果と会長指名枠評議員(藤田、橋本、
藤村)を紹介した。

5) 安全委員会(杉原)

JAMSTECの安全管理について次号のニ
ュースレターで紹介し、今後も不定期にニ
ュースレターを通じてさまざまな情報を紹介す
る予定。

6) 保全委員会(瀬岡)

明日保全委員会を開催する。各班の主要メ
ンバー、活動内容など体制作りをする。

7) 第6回大会(林原)

申し込みは約120名、口頭発表39件、ポ
スター発表49件。ポスター賞への評価につ
いての依頼があった。
11/16日は環境省・沖縄県と合同開催の公開
シンポジウムあり。

8) 次回大会について

ICRSを実施するという年であるが、夏の成
果を発表する場、学生の発表がしやすい場
であるなどということから、2004年秋も開催
することに決定。中井より国士館大学で開催
する用意があるという提案を受け、国士館大・
長谷川氏が中心になり、進めることとした。

3. その他

会員の拡大と大会への参加資格について議
論が行われた。前者についてはWebの会員
募集ページの強化が提案され、また後者につ
いては会員と非会員間の参加費の差別化を行
い、学会入会を促すことが合意された。

日本サンゴ礁学会 総会 議事録

日時: 2003年11月15日
16:35 - 17:26

議長

中森 亨(東北大学)

藤村弘行(琉球大学)

橋本和正(西海区水産研究所石垣支所)

1. 山里清会長挨拶

2. 定足数の確認

茅根創氏から説明があった。

会員数	335名
定足数	67名
出席者	103名
委任状	43名

出席者と委任状を合わせた数が定足数を満た
したため、本日の総会は成立した。

3. 議長選出

出席者からの立候補はなし。評議員会が推
薦した中森亨(東北大学)、藤村弘行(琉球
大学)、橋本和正(西海区水産研究所石垣支
所)の3氏が議長に選出された。

4. 各委員会の報告と来年度計画

4-1 事務局

(1) 2002-03年度の会計報告(茅根)

・単年度で264,729円の赤字。
・学会誌を1回しか発行できず、「日本にお

けるサンゴ礁研究II」の発行も見送ったに
もかわらず赤字となった。これは財務の
健全化を図る必要があることを示している。

(2) 2002-03年度の監査報告(保坂)

・適正に処理されていたことが報告された。

2002-03年度の会計報告・監査報告に対し、
出席者からの質疑は無く、承認が得られた。

(3) 2003-04予算案(茅根)

・「日本におけるサンゴ礁研究II」を発行する。
・赤字を減らすため、会員数増による会費収
入増加を目指す。
・ニュースレター作成費は前年度よりも減額
する。
・ホームページ作成予算を支出する。

(4) 会員動向(茅根)

・賛助会員が増えていないのは問題である。
・学生会員は減少傾向にある。学生の入会を
促していきたい。
・滞納3年で督促する。4年以上については
退会の手続きを取る。
・滞納者の連絡先を知っている者は、事務局
まで連絡する。
・滞納者がこれまでに滞納している会費をま
とめて払うのは困難である。それを払わず
に退会することを認めたい。
・滞納者に対する取り扱いを変更するため、

会則第12条の「除名」の部分で「退会」
とする改正案が提案され、承認された。

4-2 企画委員会(中森)

・「日本におけるサンゴ礁研究II」を発行す
る予定であったが、結局発行できなかった。
会員の皆さまにおわびを申し上げたい。新
年度には必ず発行する。紙媒体だけでなく、
ホームページを通じた公表方法も検討して
いる。

4-3 学会誌委員会(日高)

・学会誌第5号は11月下旬に会員に配付さ
れる予定である。これまでの査読者のリス
トを掲載した。
・原稿が集まらなくて困っている。非会員も
投稿できるように規定を改定したのだが、
年2回発行するだけの原稿は集められなか
った。もし来年1月末までに5篇集まれば、
春号を発行できる可能性がある。
・年2回発行を達成するための手だてとし
て、シンポジウムのプロシーディングスと
してGalaxeaを利用する方法もある。
・メーリングリストcoral-listで、投稿の呼
びかけを行った。また、今後は掲載論文の
AbstractをWeb上で公開する事を考えて
いる。

4-4 広報委員会(山野)

・ニュースレターを4回発行した。ICRSニ
ュースも同時に発行した。ホームページの
更新を行った。
・新年度もニュースレターを4回発行する予
定である。ホームページはこれまで以上に

充実させる。そのための予算は評議員会で承認されたことが報告された。総会においても予算案が承認された。

- ・ニュースレターの内容は、保全委員会と連携を取りながら検討していく。会員・非会員にかかわらず、ニュースレターへの投稿を希望する。
- ・新しいホームページの構成について質問があった。山野氏より、評議員が新しいホームページのデザインを検討していることが説明された。保全委員会との連携を図りつつ、会員の声を反映できるようなものにしたい旨が述べられた。

4 - 5 選挙管理委員会（瀬岡）

- ・5月に評議員選挙を行い、27名が選出された。
- ・委員長指名枠として、橋本和正氏（西海区水産研究所石垣支所）、藤村弘行氏（琉球大学）、藤田和彦氏（琉球大学）の3名が新たに評議員となった。
- ・産業技術総合研究所の小笠原啓一氏より、学会活動には大学等の研究者だけでなくNPO関係者などが参加できるように配慮されているかについて質問があった。瀬岡氏より、今回の改選までには間に合わなかったが、委員会の活動にはそのような方々にも入っていただいていることが説明された。

4 - 6 安全委員会（茅根）

- ・昨年、東工大でワークショップを行った。ニュースレターでこのテーマの連載を続けることが説明された。
- ・来年の国際シンポジウムでは、10件以上の巡検が予定されている。巡検中に事故が起らないよう、JCRSの安全委員会と

ICRS事務局との間で検討する。

4 - 7 保全委員会（瀬岡）

- ・これまでに3度開催された。第2回の会合において、7つのワーキンググループ体制で行くことが決まった。各グループの名称は次の通りである。
 - 1 統括班
 - 2 モニタリング・ネットワーク班（アーカイブデータ整理を含む）
 - 3 保全・再生技術班（サンゴ礁生態系維持機構説明も含む）
 - 4 統合的沿岸域管理班（環境ストレス低減策も含む）
 - 5 海外展開班（日本財団プロジェクト対応も含む）
 - 6 教育班
 - 7 広報班
- ・第3回会合では、各委員会の基本的なフレーム、今後の活動、コアメンバーなどが討議された。内容は随時、ホームページなどで広報していく予定である。
- ・この委員会は非会員にも開かれたものであり、いろいろな方々の参加を望んでいることが述べられた。

4 - 8 ICRS組織委員会（土屋）

- ・来年の第10回国際シンポジウムについては、JCRSだけでなくISRSと連携しながら作業を進めている。ISRSからは、優秀な研究者への支援等に関して援助をいただいている。
- ・予算不足を解消するため、企業に寄付を依頼するなどの努力を行っている。企業の紹介など、会員の方々にもご協力をお願いする。
- ・講演要旨締め切りは12月25日である。

- 遅れないように提出することが望まれる。
- ・登録料を1月31日までに支払わないと、講演申し込みが却下されてしまうことが注意された。これは、過去のシンポジウムで講演要旨提出後の参加キャンセルが多かったことに対する対応策である。
- ・講演申し込み数が多い場合は、口頭からポスター発表に変更される可能性がある。
- ・前回のバリ島のシンポジウムではポスター会場が狭く不評だったので、次回は広いポスターセッション会場を準備する。
- ・保全委員会ではサンゴ礁の現状を正確に把握するために、和文・英文の「日本のサンゴ礁」を出版する。

5 . 来年の大会について（中井）

- ・国士館大学で行うことが既に決定している。
- ・来年は国際シンポジウムが開催される年であるが、夏場に取ったデータを発表するなどの理由により開催することになった。開催時期は11月初旬～中旬で調整する予定である。

----- 会員動向（11/10現在）

通常：289名（うち海外8名）
学生：46名
賛助：11社
団体：11団体（うち海外1団体）
会友：25名
名誉：2名

合計：384件

日本サンゴ礁学会2002年-2003年度（2002年7月1日～2003年6月30日） 会計報告（日本サンゴ礁学会事務局） 2003年6月30日現在 単位：円

収入の部

前年度繰越金	1,381,800	学会銀行預金	1,467,208
		学会事務センター預り金	-85,408
会員会費	2,390,900		
学会誌広告費	40,000	コーラルバイオテク	
ニュースレター広告費	151,975	紀本電子, 三井造船, 日立インターメディクス	
学会誌販売代金	36,675		
JST情報利用料	3,780		
2002年大会剰余	100,000		
利息	90		
本年度収入合計	2,723,420		

当初予算案 担当部門 2003-2004 予算案

2,300,000 事務局 2,600,000
150,000 学会誌 200,000
150,000 広報 150,000

事務局 100,000

2,600,000 3,050,000

支出の部

学会事務センター	978,103	業務委託費	310,742
		諸経費	667,361
前受金（本年度会費繰り込み）	18,000		
学会誌印刷費	396,120		
ニュースレター作成費	778,680	14	190,995
		15	206,220
		16	206,220
		17	175,245
HP 作成費用			
評議員旅費	363,165		
諸経費	353,961		
日本のサンゴ礁研究DB	-		
2003年大会準備金	100,120		
支出合計	2,988,149		
残高	1,117,071	学会銀行預金	777,007
		学会事務センター預り金	340,064

900,000 事務局 900,000

800,000 学会誌 800,000
700,000 広報 600,000

200,000 広報 200,000
200,000 事務局 300,000
300,000 事務局 250,000
400,000 企画 400,000

- 100,000
3,300,000 3,550,000

連載 4

瀬底日記 -10- SESOKO 板子一枚

琉球大学熱帯生物圏研究センター
 瀬底実験所 中野義勝



海の上ではJAFは来てくれないので、故障は自分でどうにかするしかない。と言っても、どうにもならないこともある。こんな時、最近では携帯電話が活躍する。海亀の産卵帰りのように浜をよたよた引きずってやっと海にたどり着いたと言うのに、トントミーのスクリューの軸受けピンが折れてしまったことがある。せっかくウエットスーツに着替えていても、今日の調査はこれまでと観念しかけていた。取りあえずの電話のやり取りから、スクリューを外し問題の折れたピンを見つけはした。もちろん、こんな部品の予備はない。しばらく眺めて、思いついたのが五寸釘だった。濡れたスーツのまま国道沿いの共同売店へ入り、ピンと同じ太さの釘を探してもらった。ヤンバルの共同売店はまさにスーパーマーケットで、日用品なら大抵置いてある。置きすぎて船の轍びたアンパンに文句を言えば、早く買わないからと切り返されるところもスーパーではある。

で、釘は手に入った。後はサンゴ調査の七つ道具のハンマーとタガネで、適当な長さに切ればピンの代替えになる。小さなエンジンならではの応急手当だった。調査も無事終わり、帰りもタライを背負って山原路をひた走った。

格好悪い。よたよたと山道など走っていても、後続車が近寄ろうとしないのは相当に警戒されているからに違いない。颯爽とトレラーに乗せたレジャーボートを牽いた4WD車などとすれ違つと、向こうが面白がって振り返る。目的地について浮かべてみても、やっぱりタライである。公園の池に浮かんだ貸しポートの方がよほどスマートだ。

さて、タライいっぱい調査資材を積んで、4馬力のエンジンを据えと船になる。荷物を積むと喫水線は船端から10cm程しかないの、イノーの中くらいしか移動できない。大潮の干潮時などは牽いて歩く方が多いくらいなのだが、荷物を持って泳ぐことを思えば、これで充分にありがたい。あまり悪口も言えない、かわいい「トビハゼ(トントミー)」である。

連載 5

サンゴ礁関連施設 深訪 INQUIRY -10-

財団法人 黒潮生物研究財団
 黒潮生物研究所

黒潮生物研究所 所長 岩瀬文人



関わる行政の施策に協力したり、地域の小中学生を対象としたサマーキャンプを開催するなど、幅広い活動をしています。

研究所は海水取水設備(最大約10t/h)、サンルームを併設した飼育室や実験水槽群、上水・温水・海水が使用できる研究室、様々な工具がそろった工作室等の研究設備、顕微鏡や水質測定機器等の実験器具の他、海域での調査の足となる25フィートFRP製ディーゼル船内外機船「つきなだ」やシーカヤックを備えており、外部の研究者や学生やの利用も受け入れています。利用者は研究所に宿泊して様々な施設や実験器具を利用することができます。詳しくはホームページをご覧ください。



高知県幡豆郡大月町西泊 560 番イ
 電話 0880-62-7077 FAX 0880-62-7078
 URL <http://www.kuroshio.or.jp>

黒潮生物研究財団は、大阪に本社を置くフッ素化合物メーカー、ステラケミファ(株)とその社長が社会貢献を目的として出捐(寄附)し、2000年4月に高知県に認可されて設立された財団法人です。設立の趣旨は「黒潮流域における環境と生物との関わりを調査研究(設立趣意書より抜粋。以下カギ括弧内は同様)」することで、「水産学分野を除いて(中略)沖縄から紀伊半島まで、千キロ近くも海域生物群集に関する研究施設の空白地帯が生じている」ことから、「サンゴ礁地域と温帯地域の中間点に位置し、黒潮の影響を色濃く反映する生物群集が形成されている高知県」の南西端、大月町に活動の拠点として黒潮生物研究所を建設し、2001年10月から本格的な活動を始めています。

研究所は太平洋に面した小さな漁村のはずれに位置していて、周囲をウバメガシやヒメユズリハを主体とする照葉樹の里山に囲まれ、小川にはイシガメやメダカが泳ぎ、

眼前の海にはエンタクミドリイシ、クシハダミドリイシ、スギノキミドリイシなどミドリイシ属を主体とするサンゴ群集が広がっているという素晴らしい自然環境に恵まれています。西平・Veron 1995によれば隣町の土佐清水市海域から127種のイシサンゴが報告されていますが、このリストに記載されていない種が次々と発見されており、実際には150種を超えるのではないかと考えられます。

現在、研究所ではミドリイシの再生産に関する研究をメインに行っていて、昨年から自然産卵されたクシハダミドリイシの受精卵を水槽内で育てることができるようになり、今年は種苗の生産へと発展しています。関連する研究としてサンゴの生殖周期と配偶子形成過程の研究や八放サンゴ類の生育環境の研究なども行っています。また、荒廃したサンゴ群集を復元するための方策を検討する調査を請け負うなど環境保全に

編集後記 Edit postscript

2004年になりました！皆様、良いお年をお迎えでしたでしょうか。
 今年は、ついに第10回国際サンゴ礁シンポジウム(10thICRS)開催ですね。シンポジウムが

成功するよう、盛り上げていきましょう！
 今年も日本サンゴ礁学会を宜しくお願い申し上げます。

編集担当 波利井

JCRS
Japanese Coral Reef Society

2004年1月21日発行

日本サンゴ礁学会ニュースレター
 Newsletter of Japanese Coral Reef Society
 No.20 [2003/2004 No.3]

●編集・発行人/山野・波利井・中井・杉原・木村・梅澤・野崎 ●発行所/日本サンゴ礁学会
 ●事務局/茅根 創 <kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp>
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院
 理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax:03-3814-6358

小型・高精度・低価格への挑戦!

COMPACT SERIES

Velocity Direction
Temperature

Chlorophyll/Turbidity/
Temperature

MANUFACTURERS OF
OCEANOGRAPHIC RESEARCH INSTRUMENTS

ALEC

AAQ1183

AAQ1183は、弊社コンパクトシリーズに
続く、最新の小型軽量タイプの多成分水質
計です。直径90mm、全長276mmの小
型ボディは、水中重量1.5kgと非常に軽量
であり、片手で楽に操作できる水質計です。
もちろん材質には強固なチタン合金を使
用していますので衝撃に強く、防錆に適し
ています。センサボディとケーブルは、着
脱式水中コネクタを採用しており、必要に
応じてケーブル長の変更が行えます。また、
ケーブルの直径は8.5mmながら、引張強
度30kgのケブラー繊維入りで補助ロープ
なしで測定が行えますので、陸上、船上で
の取り扱いが非常に簡易になりました。
処理ユニットは調査目的に応じ、簡易型、携
帯型、多機能型など、それぞれに特色をも
たせた4つのモデルを用意しており、いず
れのユニットに接続しても即使用可能です。



Conductivity Temperature

Wave-height

Temperature Depth

Dissolved Oxygen
with Wiper



アレック電子株式会社

〒651-2242 神戸市西区井谷台東町7丁目2番3 TEL.078-997-8688 FAX.078-997-8609

■東京営業所: 東京都武蔵野市中町1丁目20番9号・上内ビル3F TEL.0422-56-2181 FAX.0422-56-2182
Homepage <http://www.alec-electronics.co.jp> E-mail info@alec-electronics.co.jp